

国立会中の会 50周年記念誌

私とくになち 会報連載全5回中 第3回 2026年7月発行

(記念誌は今号が第3回となります。全5回を予定しており本号含めて残り3回会報に挟み込まれます。)

カラーポケットパーク商店会のこと

(中1丁目 岡本 貞雄)

国立駅南口前にある富士そばとマクドナルドの間の小道を「ブランコ通り」と思っている市民が多いようだが、ブランコ通りは50メートルほど先からで、そこから歩道が白いのでよく分かる。

一方、富士そばとマクドナルドの間の小道を行って、左側の画廊を大学通りへ伸びる道がある。飲食店が多い通りで「国立カラーポケットパーク」という商店会だが、市民の方々からはそのように呼ばれたことは一度もない。長ったらしい名称だが、外国では L 字型の裏通りを「ポケットパーク」と呼ぶらしく、初代商店会長の伊藤さん(ロージナ茶房)が命名した。また、商店会名の初めの「カラー」は、道路の色がレンガ色だったことに由来する。

国立カラーポケットパークは1977年、ブランコ通り商店街の開発に対応して結成された商店会である。事前に説明のないまま工事を開始したことで、近隣の商店が決起して開発反対の行動を取った。具体的には分譲地の入り口(現在の時田園の前)に、大きなコンクリートの塊を置き、通行を遮断したのである。しかし、この障害物は意外と早く撤去された。それは、分譲地に市内の商店が何店舗か出店するということを聞き、抗議活動を早々に中止したためである。

国立カラーポケットパークは、この抗議運動でやっと商店会として活動できるようになった。上下水道の設置、電灯線の埋設工事、街灯の新設など商店街としての体裁が整ってきた。先述のとおり、砂利道だった道路もレンガ色に舗装された。何よりも、ブランコ通りもカラーポケットパークも自動車の乗り入れが出来ないので安心して散策できるのが利点である。

話は戻るが、国立カラーポケットパークの地域は、1953年ごろに宅地として分譲されたい。分譲地に水を供給する高い井戸タンクはあったが、下水道やガスはなかったように思う。

私の店(レッドトップ)は1959年の創業だが、当時すでに金文堂、野木写真店、ロージナ茶房、邪宗門、阿Q、エース、幸楽などの店があった。たましんは現在の富士そばの場所にあり、現在のたましんのある場所は空き地で、中央に街頭テレビがあった。

レッドトップは借り店舗だが、この建物は当初「外人ハウス」として建てたものらしい。二階建てのブロック建築である。「外人ハウス」とは、立川基地に駐屯していた米国軍人で家庭をもっていた人たちに、近隣に



レンガ色の道、カラーポケットパークに今もあるレッドトップ

米軍が借り上げた住宅である。ベニアばりの安普請だが、水洗トイレが完備しており、暖房用なのか、庭に石油のタンクがあった。

当店の建物も、この駐留軍用に建てたものだが、実際には外国人が住んでいたという形跡はない。ただ、家の間取りは洋風で、シャワールームとトイレは一緒に浴槽はなかった。この地域はまだ下水管が通っていなかったが、この建物には水洗トイレが完備されていた。

ところで、当店が開店した頃は、お客さんの半数は駐留軍で、深夜立川から流れてくる。これは米軍の基地では風紀的な問題で、深夜の12時から5時まで「オフリミット」といって、兵隊（主に空軍）は立川市内にいてはいけないという軍紀によるものだ。国立のこのエリアだけが、まるで基地の街のような状態で、これを憂いて、環境浄化を掲げる人たちからは随分と叱られたものだった。

環境の良さが自慢の国立市のこのエリアで、かつて「基地の町」のような状態だったことなど想像もつかないことだろうが、この状態を知っている方も少なくなってしまった。なんとか記録として残しておきたいものである。

ところで、国立カラーポケットパークには古い店が多い。私も長いこと商店会長を務めてきたが、昨年若く若い人にバトンタッチをした。なにも実績を上げられなかった私と違い、行動力に期待が持てる。何よりも「国立カラーポケットパーク商店会」の存在が広がることを願うのみである。



67年間変わらないレッドトップの店内

中2丁目の『むかしの思い出』

（中2丁目 小野寺 俊一）

今から約80年前、10歳の時に、現在居住している中2丁目に越してきました。終戦直後の昭和21年頃から昭和27年頃（1946年～1952年）にかけて、子ども心に感じた「中2丁目付近」のご近所付き合いや、日々の中で体験したことを思い出しながらお話しします。

1. 国立にきた理由

幼少期、都内小石川区（現在の文京区）雑司ヶ谷町に居住していましたが、戦争が激しくなり、軍からの強制疎開命令で母の実家がある埼玉県に移住しました。そして昭和20年8月、終戦を体験。小学3年生（10歳）でした。疎開先から退去を要求され、父親の勤務先の関係で3年間借家に仮住まいした後、現在の場所で、掘っ立て小屋を建てての生活が始まったのです。

2. 当時の生活

当時の商大（現一橋大学）と山水中学（現桐朋学園）に挟まれた地区は、国立駅付近からも少し離れており、「ぽつん、ぽつん」と数軒の家があるだけでした。当時は大変な食料不足で、得た土地に芋や陸稻（お



遠足



谷保小学校

かぼ)を作付けして凌ぐ、まさに敗戦の難民生活でした。敗戦直後の状況は非常に貧しく、「私の家だけがこんなに苦しいのか」と思ったりもしました。かなり貧富の格差を感じる時代でしたが、我が家の近所は居住者同士が結束しており、大人も子供も仲の良い付き合いがありました。おかげで私は「貧乏が得意」!

3. 小学校の通学

当時の谷保村国立地区では、大学関係の方や土地購入者の御曹司は国立学園小学校に、一般の児童は谷保小学校(現国立第一小学校)に通っていました。国立は比較的、小さな街ですが、谷保村中平地区にあった小学校まで、子どもの足では1時間ほどかかりました。立東地区(現在の北地区)や東地区(プレスタウン)からも、みな徒歩で通学していました。冬場の積雪した道を下駄で歩くと、滑ったり途中で鼻緒が切れたりと苦戦したものです。谷保駅周辺や「都立五商」付近で一休みした、そんな「みちくさ」も今では楽しい思い出です。記念誌第2回に記載されていた、K様の「5代にわたる国立学園小学校卒業」というお話は、とても羨ましい限りです。

4. 近所付き合い

Nさんがまとめ役・リーダー役を務めて町会議員に立候補しましたが、知名度が今一步だったのか、残念ながら票足りずでした。

周辺はまだ人口が少ない状態でしたが、正月などは近所で小倉百人一首を持ち回りでかるた取りを行い、親睦を深めていたようです。後に草野球チームを結成し、国立町の大会にも出場しました。試合会場は一橋大学敷地内です。Nさん三兄弟やTUさん三兄弟には大変お世話になりました。皆で富士五湖付近へキャンプに行ったことや、「釘刺し」という遊びに熱中したことも楽し



谷保小学校

かった思い出です。

やがてそれぞれの家の食料事情が改善してくると、自宅で草花を育てるようになり、おふくろさんたち4、5名でその花を売りに行きました。まさに「花売りおばあさん」です。主に仏花の花束を立川付近まで売りに行っていました。安価だったため喜ばれていたようです。

5. その他

我が家周辺は飲料水の確保に



お祭りの様子



小野寺さんの親友、バットを振る

苦労しました。各家で井戸を掘り、普段はそれを利用していましたが、渇水期には近所に「もらい水」に行きました。関東ローム層の赤土の下にある砂利層が崩れると井戸が使えなくなるため、その際も隣人宅にお世話になったものです。また、東地区の八興社（パンの製造販売）付近は、豪雨が降ると排水ができず、なかなか水が引きませんでした。そのため、大きな砂利穴が掘られていた記憶があります。

様々な生活様式が変わりましたが、今では見られなくなった、風呂桶を売る店があったことも

思い出されます。

我が家は新参者扱いでしたが、当時は娯楽がなかったせいか、夕方になると日本自動車塗料工場の職員と思われる NM さんという方が、毎日のようにやってきました。玄関先で茶わん酒を飲んで酔っ払い、自慢話や愚痴をこぼしては父母を困らせていたものです。しかし、芋などを持ってきて食料を供給してくれるなど世話になった面もあり、仕方なく付き合っていたという思い出があります。いつも「嘘」や「誇張」の混じった話ばかりしていましたが、子ども心に面白い情報源として聞いていました。国立は1区画200坪、1坪100円、水のひかない地区は8割程度の値段、などという話も。当時お世話になった大先輩や先生、長老の方々のほとんどは故人となりましたが、今でもその思い出話が尽きません。

思い出すままに書き留めた断片的な事柄です。また、会報第32号に掲載していただいたときの内容と重複いたしますが、ご容赦ください。

写真提供:ご本人

記念誌に寄せて

（富士見台1丁目 砂原 十郎（元会長））

私が国立会中の会に入会させていただいたのが、井上会長さん時代の昭和50年ごろと記憶しております。長年経過して記憶も薄れて不確かですが、当時を振り返り国立会中の会の活動などの思い出を記してみたいと思います。会の運営に携われた多くの役員の皆さんのお名前も失念、記憶違いなどがありましたらお許し願います。

当時の活動で世相を反映してか中の会で結婚相談を行いました。今月は何組ありましたとか、担当の長友さん（元市議会議員）がご報告されて…。アットホームで真剣な、地域に密着した町会であることに感銘を受けたことを思い出します。また防災の日には、一橋大学構内で防災訓練が行われました。中の会の会員さんも参加されて、真剣に担架搬送や避難訓練に取り組む姿も昨日のように甦ります。毎年恒例の新年会には、田代さん（現副会長のお母様）を先頭に手作り軽食で楽しみながら、報告・クイズ・お話をし、最後に国立の歌（長友さんのご主人作詞）を合唱しました。食材はご近所の八百屋さん、魚屋さんからの調達でした。小

泉内閣当時、中の会で郵便局保険の取り扱い団体に参加して、保険の払戻金が活動資金として利用できたのも時代の流れでしたでしょうか。当時の会計は諸井さん(元民生委員)などでした。また、大学通りの清掃も長年継続されて現在まで行われています。住んで良かった国立を象徴するかのようです。

新制一橋大学50周年記念のときでしたでしょうか、兼松講堂前に能舞台を設置しました。焚き火灯を燈した本格的な能舞台でした。中の会の会員さんもお招待いただき、普段体験できない能鑑賞の機会を作っていただいた、当時の石弘光学長のご配慮をあらためて感じました。

徒然なるままに雑記させていただきました。国会中の会のご隆盛を願いながら。

頑亭先生のアトリエと思い出

(中2丁目 ^{せき じゅん} 關 純)

彫刻家であった父、關 頑亭(がんてい、本名は保壽)が、現在の中二丁目に最初のアトリエ(昭和52年に焼失)を構えたのは、戦後に実家の「せきや」を拠点として中野の宝仙寺山門の金剛力士吽形(うんぎょう)を制作した後の、昭和33年と聞き及んでいる。どのような経緯で現在の場所にしたのかは問うたことはなかったが、「せきや」を継いだ長兄の關 栄一が東に居を構えたので、すこし離れたところにしたかったのかもしれない。

後に山口瞳先生から「フウセン女史」と呼ばれ、頑亭先生を終生支えてきた帽子デザイナーの母、關 民(たみ)の意向もあったように思う。



国立音大附属幼稚園入り口左右のオブジェは頑亭作

昭和31年生まれの小生が、もの心がついたころから頑亭先生によく連れていかれたのは、自宅と隣り合わせで、もっぱら武蔵野の林が残る一橋大学(当時は商大と呼んでいた)での椎の実拾いだっただ。頑亭先生は拾い集めた椎の実を七輪の上に小さなフライパンをのせて煎って肴にしながら、能面研究をされていた野村万蔵先生らとお酒を飲みながら語り合っていた姿をよく覚えている。

小学一年生から四年生までの期間を、大学通りと桐朋通りのところにあった国立音楽大学附属小学校の旧校舎で学ばせていただいたが、入学した頃の心に焼き付いている思い出がある。まだ田舎の風景の



約70年前の關さん宅

残っていた大学通りの緑地帯に、クラスみんなで廿日大根の種を蒔き育てたのだ。同じ教室で学んだ級友も覚えていないかも知れないが、担任をしていただいた先生とともに毎日帰りがけにその成長を楽しみにしていた。収穫のときに土の匂いのついた真っ赤な小さくともしっかりとした廿日大根を手にしたときの驚きを何年経っても忘れない。国立を散歩してその場所に通りがかった時に、妻や幼少の子供達にこの話をして懐かしんだ。思い出というものはこういう

ものなのだろう。自分の心に焼き付いて時々優しく「驚き」の大切さを問いかけてくれる。

中二丁目（当時は北多摩郡国立町中区200番地）からスクーターに乗せられて頑亭先生の姉妹が嫁いだ谷保の藤井（矢澤家）と石神（西野家）に連れられて行ったこともあった。従弟たちと遊んでいる間に、頑亭先生は谷保の田畑の畦道からスケッチをしていたのだろう、頑亭先生が遺した膨大な資料を整理するなかで思い当たる絵がいくつか出てきた。谷保の原風景の「ハラ（自然）」と人の営みが宿る「ムラ（文化）」の共存の景色が、縄文が好きだった頑亭先生の心を動かしていたのかもしれない。息子には見えなかったが、心の眼で谷保の息吹を感じ取り、念を入れながら写生していたように思う。

頑亭先生に常々教えられてきたことのひとつは、「心の宿る場所に人が集まる」ということだ。無理をせずとも心が宿るところにはいつしか人が集まり、周りの自然と共存しながら静かに営みを繰り返して文化を創出し、その積み重ねが歴史になってゆく。頑亭先生は谷保と国立にはその力と先人の遺してきた歴史があるのだということを感じ取っていたのだろう、昭和52年の旧アトリエ焼失後に現在のアトリエを再建した際にも、自宅にはけっして塀を設けず、誰でもが集えることを楽しみにしていた。この、眼に見えるものではないが、国立の文化と歴史の源流を後世に繋いでいくことが、我々に課されたとてつもなく楽しい課題なのかもしれないと、頑亭先生や母の思いを噛みしめながら朝の庭掃除に励んでいる。

写真提供:ご本人

国立で幸せに年老いて・・・（中1丁目 三上 義一）



旧国立駅舎スケッチ

画:三上 義一

私が当時の「北多摩郡谷保村大字国立」に引越して来たのは昭和25年の大学生時代。当時は水道もガスもない「村」でしたが、三角屋根の駅舎、駅前から延びる大きな3本の道路と見事な桜並木。級友を招いて自慢したことをよく覚えています。

今の三井住友銀行の処にエピキュールという、藤棚の下にテーブルをセットしたお洒落な喫茶店がありましたが、改札を出てまず目につくのが、その店の前に立つ桜。毎年春が来て、会社からの帰途、そこに数輪の桜を見つけては、ああ今年も観られたな!! と思い、来年も観たいな! と願いながら、いつの間にか75年の歳月が流れてしまいました。

大学通りの桜は平成天皇誕生の際に村の青年団が記念植樹したと聞いていますが、平成の中頃には枯れる寸前の桜が何本もあり、市では「桜守」を作り、定年後の私も参加して、草むしり、肥料づくり、施肥など、仲間と汗をかけたのも楽しい思い出です。

当時 JR 国立駅の公衆トイレの裏に大きな緋寒桜ひかんがあったことを記憶される年配の方も多いと思いますが、JR の高架化で伐採されるのを惜しんだ桜守が接ぎ木して後世に残すことになり、雪の散らつく寒い日に四小で専門家の指導を受けながら接ぎ木作業を実施。成功率は低いとのことでしたが、幸いにも私が接ぎ木した3本の内の2本が成功し、庭に下ろしたら翌年早くも花をつけて呉れました。ただ狭い庭で育てるのは無理

なので、矢川の桜の畑に移植。その後、受験シーズンの生徒の心を和ませたいとの希望を持った国立一中の当時の今井校長先生の強いご要望を受け、創立記念日に3本植樹されることになり、私が接ぎ木した苗木もその中に選ばれたことも誇らしい思い出です。

いつも大学通りを散歩しながら思うことですが、国立ほど美しい景観を持った街は、そうそうないと思います。春の桜、初夏のまばゆいばかりの新緑、秋のイチョウ、広い緑地帯と大学通り、そして一橋大学。短い距離ですが、大学敷地までの大学通りに並ぶ商店街も、いかにも国立らしいたたずまいです。

中の会の50周年記念誌に、古川崇様が青山の高級スーパー「紀ノ國屋」が大学通りに開店したことを書かれておられましたが、当時同店は、青山以外に軽井沢・鎌倉にも出店していて、国立もこれらの街に肩を並べる高級住宅地になったんだ！と、子供じみた感懷を持ったことも懐かしい思い出です。

私はここ国立で家庭を持ち、子供を育て、孫を抱き、そして両親を看取り、あっという間に、95歳の誕生日を迎えてしまいました。定年後、近所の老人クラブの役員をして、高齢者の健康維持と生きがいづくりの場づくりをさせて頂いていますが、これもこの地で生涯を送りたいと願う高齢者を、私自身を含めて少しでも応援したいとの願いから…。

一方、この学園都市に似合うのが子供たちの笑顔です。昔から子供が好きで、数十年前から家内と八小の児童の見守りをしていますが、老人クラブで八小の一年生に昔遊びを教える行事を20数年以上も続け、お陰様で私たちは毎年子供たちから元気を貰い続けています。この高齢者と子供たちの地域交流活動が、平成26年に全国老人クラブ連合会から高く評価され、全国表彰を受けたことも私たちの誇りです。

また家内も20年ほど民生委員を務め、多少なりとも地域社会のお役に立てる機会を与えて頂けたことにも感謝です。ただ残念なのは、一緒に幸せな老後をこの地で送ろうと思っていた家内が施設に入居してしまったこと。認知症と膝の疾患で車椅子生活を余儀なくされ、同居する息子夫婦の応援を受けながらの自宅介護も限界となり、市内の介護施設に入れざるを得なくなりました。でも今は家内は自分の置かれた立場が殆



今のマクドナルド前の三角地点にあった火の見櫓の上からの写真。左の道路が富士見通り、右の道が教会通りに通ずる通りです。三角地点にあるのは関屋酒店の倉庫（今はタリーズ）。その向こうがマーケット。中央に見える煙突は十松さん経営の富士見湯。奥の松林と道路を隔てた右奥あたりが三上宅。

ど分からない「多幸症」になったお陰(?)で穏やかに日々を過ごせています。また週一回、時には娘と共に面会に行くのも、なんとなくワクワク感(?)があって、考えようによれば、これも楽しみの一つかも知れません。

私自身はこの歳になってもお陰様で特に健康には問題なく、このまま国立で幸せに生涯を終えられれば…と願う今日この頃です。

写真提供：国立教会

国立で季節を真っ先に教えてくれる大学通りの木々、これから迎える季節も蝉の声と木蔭で私たちを癒してくれる。この街に大学通りと桜の木があって本当によかった！と思うひと時でもある。

さて、国立に生まれ育った私にとって、“私とくにたち”として先ず浮かぶのは、一橋大学が遊び場だったこと。小さい頃は一緒に暮らしていた祖母に連れられ兼松講堂の前の池の辺りや林の中で、小学校中学年から友達と野球場で毎日のように、週末は父や弟と陸上競技場でと、まるで自分の家の庭かのように大学構内で遊んでいた。時には家から大きな網を持って出かけ、大学の池の鯉を捕ろうと格闘したこともある！今のよう厳しいセキュリティもなく、何時でも誰でも何処からでも構内に入れたことが懐かしい。

遊び場としては、家の斜向かいの小高い土地に雑木林があって、近所の子ども達10人くらいと暗くなるまで遊んでいた。当時の国立には未だ未だたくさんの雑木林があって、子ども達の遊び場だったが、今ではすっかりなくなってしまった… とよく長年の国立住人と話す。

そして、次に思い浮かぶのは近所のお店屋さん。富士見通りの魚屋「駿河屋」、八百屋「ムラキ」、豆腐屋「富士屋?」、肉屋「オギノ」ともう一軒、生麺の「亀製麺所」(亀さん)、和菓子の「青柳」、気軽なおやつとして店先のショーケースに和菓子を並べた八百屋「かくとら」、「原幸ストア」や旭通入り口の「ヤマトストア」。多分、私の“初めてのおつかい”はお豆腐屋さんだった。八百屋さんでは天井から吊るされた籠にお金が入っていて、お店のオジサンが受け取った代金を籠に入れ、そこからおつりを取って渡しているのを興味津々で眺めた。製麺所の「亀さん」では、方言で話す元気なおばさんが大好きで、よく用事もないのにお店に入り込みお商売の邪魔をしていた。こう書きながら思い出したのは、大学通りにあった「小鳥屋」さん。インコやオウムやジュウシマツにニワトリ等々、ありとあらゆる種類の鳥カゴが並んで居て鳴き声の賑やかな店内は、独特な臭いがして今でも蘇る。今考えれば、衛生的だったとはとても言えないが、色とりどりの小鳥が珍しくてよく遊びに行っていた。

これらのお店は、もうずい分前に1軒、また1軒と店仕舞いをしてしまい、商店街は寂しくなったが、八百屋さんの果物部門として西友(“マイマート”と呼ばれた頃もあった)前に出来た「フルーツムラキ」が今もあることは有難い。商店街には昭和の終盤までチンドン屋さんが来ることもあり、見かけると後ろを着いて歩いたことも思い出す。

その他には、おもちゃ屋さんの「フレンドトイ」と「スズヤ」、畳屋さんや箒やタワシなどを揃えた生活雑貨屋さんもあり、生活に必要なものは身近なお店で揃えられる時代だった。今も変わらず営業しているのは「金文堂」「シマダ文具店」等、他には幾つあるのだろう…数えてみたい衝動に駆られる。しかし、お店は閉じてしまわれたが、「フレンドトイ」は今でも店主のオジサンがああビルに住んでいて時々行き会って挨拶を交わすし、「スズヤ」の店主も3階にお住まいで、今は都内在住の大学生のお孫さんが国立でユースワークの活動を始めている。何故国立で? と聞いたところ、「国立はこういう活動をしやすい場所」だと教えてくれた。

この「国立はこういう活動をしやすい」というのも、ひょっとすると国立の特色なのではないか? と感じる。というのは、子どもの頃の記憶でもう1つ思い出す中に、祖母に何度となく連れられて行った、市議会議員選挙に立候補した女性候補の立会演説の光景があるからだ。投票所の公民館へもよく祖母に着いて行ったが、

其処にもいつも祖母の知り合いの女性の方々（今思えば、「国立婦人の会」の方だったのか？）がおそらく選挙管理委員として座っていらしたし、大人になる過程でも「国立の“市民自治”」という言葉は何とはなく耳にしたように思う。市民が地域に目を向けて活動することは、特別なことではないという土壌が国立では培われていったのだろう。

私が地域と関わるようになったきっかけは、実は15年ほど前からの“国立駅周辺まちづくり”で、国立という街の歴史を紐解き、市民とりわけお母さん達の力に驚かされた（祖母もそのお母さん達の1人であったというからビックリだ!!）。当時まちづくりを検討し合った仲間から投げかけられた言葉に思うところあり、朝の八小通学路の見守りの後、駅周辺のゴミ拾い活動に参加するようになった。

そして今では社会福祉協議会が進める国立市中地域小地域福祉活動として発足した「なかなかいい会」に参加した結果「たまご（多孫・他孫）食堂」という子ども食堂（＝誰でも食堂）にも関わることとなり、此処から派生し更に国立の様々に関わることとなった。不思議な巡りあわせではあるが、国立という街に育てられた結果なのだろうと、自分自身を納得させている。

街を開発した箱根土地の堤康次郎さんは、大学通り・旭通り・富士見通り、そして生活道路の幅まで指定した。その構想のもと100年前に誕生した国立。「この街の形に触れたことで都市計画や建築を目指すようになった人も多いと思う」と国立で学び都市計画の道へ進んだ友人の言葉がある。国立の住人は“街への愛着”も強いと感じる。現に二小・一中の同級生達も意外と大勢が今も国立に暮らしている。

国立という街には、何か不思議な力があるのかも知れない。地域活動は、私を育ててくれた街への恩返しとして、これからも細く長く続けていかれたら～と思う今日この頃。

今回このような機会を戴いたことに心からの感謝をお伝えし結びとしたい。

追記：

国立のまちづくりに大きく関わった女性たちの姿は、映画『町の政治 べんきょうするお母さん』（岩波映画社、1957年、公民館所蔵）にも描かれているので、ぜひ機会を見つけてご覧いただければと思う。

写真提供：ご本人



たまご食堂



なかなかいい会 Facebook

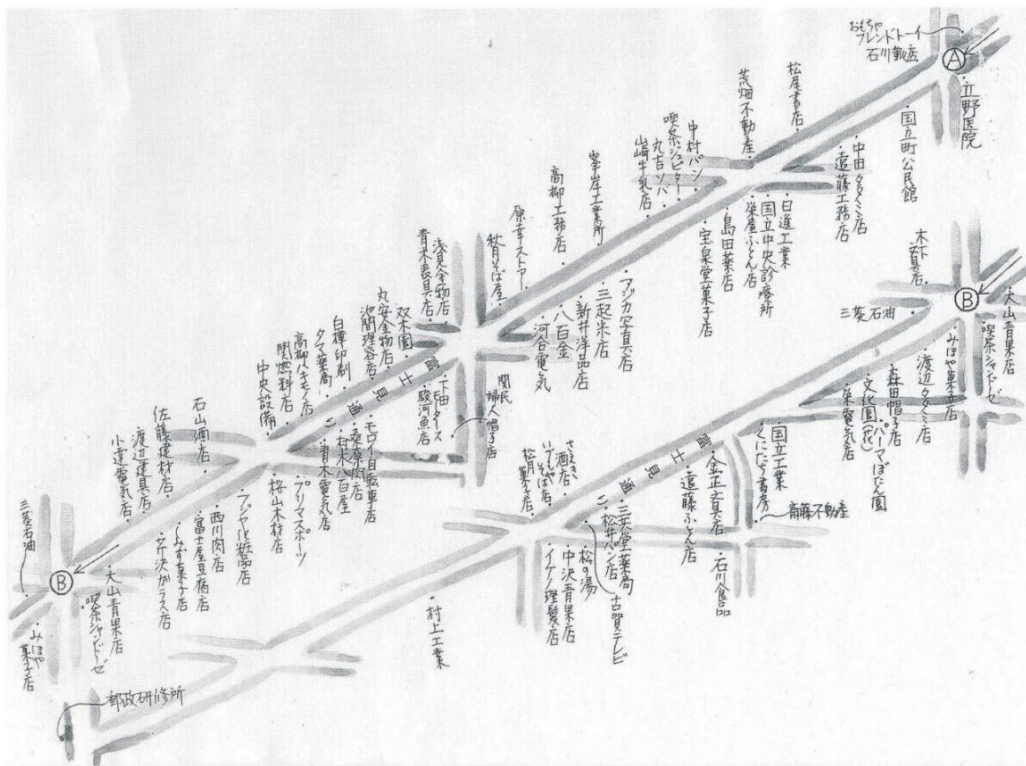
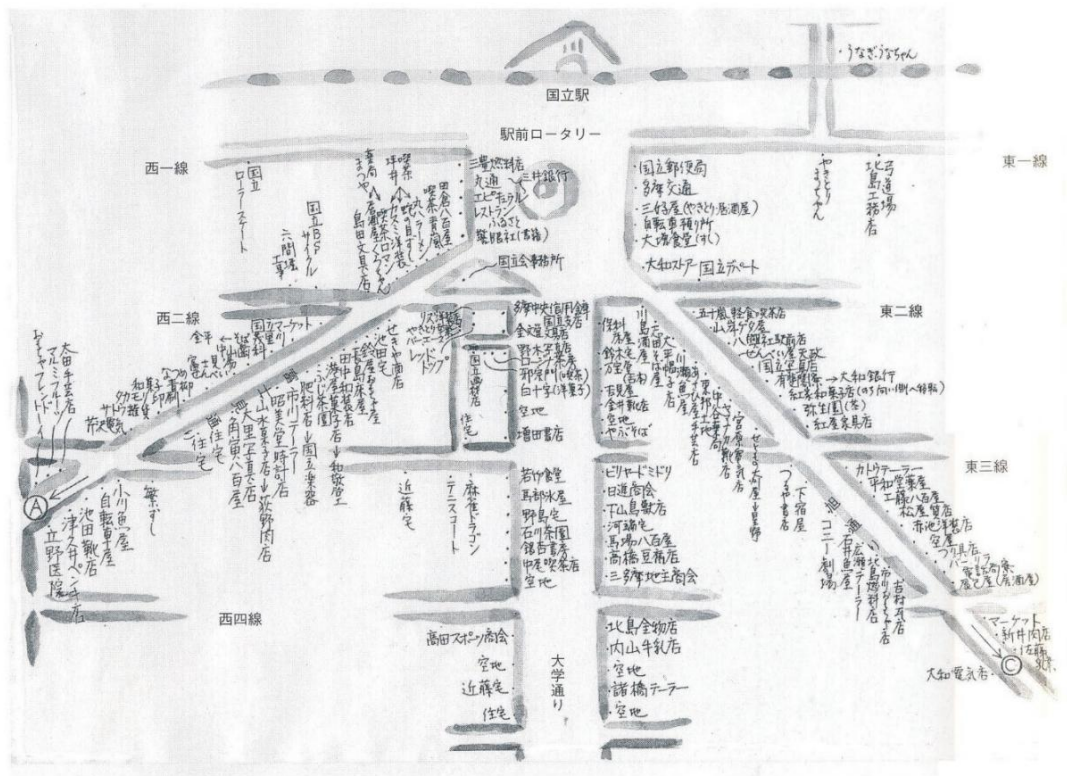


来年で国立会中の会が50周年を迎えるにあたり、記念事業として会員から文章を寄稿していただき文集としてまとめ、今回で3回目を迎えられました。全5回で連載いたします。全号集めていただきファイルなどにぜひまとめてみてください。素敵な文集が完成いたします。

国立会中の会50周年 PJ 係より

昭和30年代の大学通り、富士見通り商店街地図

10年の期間内に新旧入れ替え、閉店、移動があり、図にズレが生じているが、昭和30年代のおおよその商店街の様子である。この図は約15人の商人の方々の記憶と資料により作成された。



出典：『くにたち商店街形成史—国立大学町を中心として—』、国立の自然と文化を守る会（編）、138頁